

沼津市若山牧水記念館

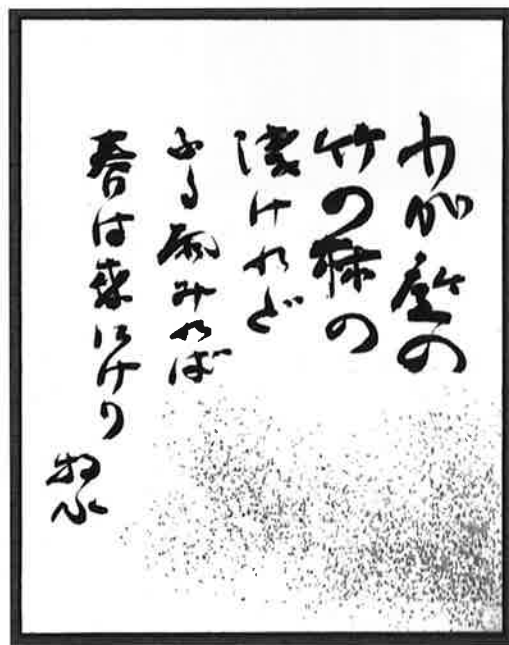
第48号 2012.3.15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

この歌の色紙は、当館に二点ある。一点は若山家の所蔵で、赤色に金粉がちりばめられた鮮やかな色紙に丁寧に書かれた作品であり、もう一点は本会の所蔵で、右下に金粉を配した縦長の色紙にのびのびと書かれた作品である。

牧水の色紙は、人柄を表すように素直に筆の赴くままに用紙一杯にのびやかに書かれたものが多く、多くは四行に書かれていて、五行に書かれたものは少ない。特にこの色紙のように五七七七と五行に書き分けられたものは貴重な例外とも言えようか。

わが庭の竹の林の浅けれど
ふる雨みれば春は来にけり 牧水



「わが庭の・・・」は、大正五年六月に天弦堂書房から発行された第九歌集『朝の歌』に収められている。『朝の歌』は大正四年の作品「秋より冬へ」、同五年の作品「春浅し」及び同年三月からの東北旅行で詠んだ「残雪行」の三部で構成されており、二百七十三首を載せた菊半截判の地味な歌集である。

牧水が信州にいた妻喜志子と長子旅人を東京へ呼び寄せて一家を構えたのは大正二年六月末、小石川の大家窪町に住んだ。この年の七月末には、牧水主宰と言ってもよきそうなる第二期『創作』を発行している。しかし、大正四年の初めに喜志子が腸結核で入院し、一月末に退院はしたが、転地療養が必要という医師の勧めで、三月十九日に三浦半島に移住したのだ。

「わが庭の・・・」は、大正五年の春の作で、芹つみに妹のさそふに誘はれてせんかたもなき野に出でにけり

などといった落ちついた作品が並んでいる。

この年の牧水は、前年の喜志子の療養と長女みさきの出産で、比較的穏やかな正月から二月と過していた。しかし、当然内心は旅心満々で、

みちのくの雪見に行くと燃え上るころ消しつつ銭つくるわれは

などと詠い、三月十四日にはついに東北へ旅立っている。この時期の作品は、生活の安定と環境の変化によって、『別離』『路上』『死か芸術か』と続く流れを転換した新しい境地の開花と見ることができ。

(須永秀生)

俳人・飯田蛇笏宅での牧水 飯田秀實

若山牧水が来て滞在しました。そのとき、祖母が病氣して重体でしたが、兄は二階の座敷に牧水さんを通して、そのとき食事などいっさい私が面倒みましたが、牧水さんは十四日間ほどいらして、それから信州へ行かれました。その三日後に祖母飯田奈美は亡くなりました。大病のうちでも、牧水さんに、兄さんは、ひとつとも言わなかった。

(「妹おもいのやさしい兄」)

昭和五十五年十月三日付 山梨日日新聞

俳人飯田蛇笏の十九回忌にあたって、蛇笏の妹志津糸が、明治四十三年九月に牧水が蛇笏を山梨に尋ねた時の回想の一文である。



歳の2階「俳諧堂」の蛇笏

蛇笏と牧水との交流については、篠弘氏が「俳人・飯田蛇笏との出会い」と題して、沼津市若山牧水記念館報第三十号に記しているが、牧水が山梨の蛇笏の居宅を訪ね、逗留した前後のことを書かせていただく。

飯田蛇笏は明治十八年四月、山梨県東八代郡五成村(現 山梨県笛吹市境川町)に地主の長男として生まれた。この地域は古くから月並俳句が盛んで、蛇笏(本名 武治)も幼少のころから、親戚の家で開かれる月並俳句に参加していた。このころの作として

もつ花におつる涙や墓まゐり

という句がある。

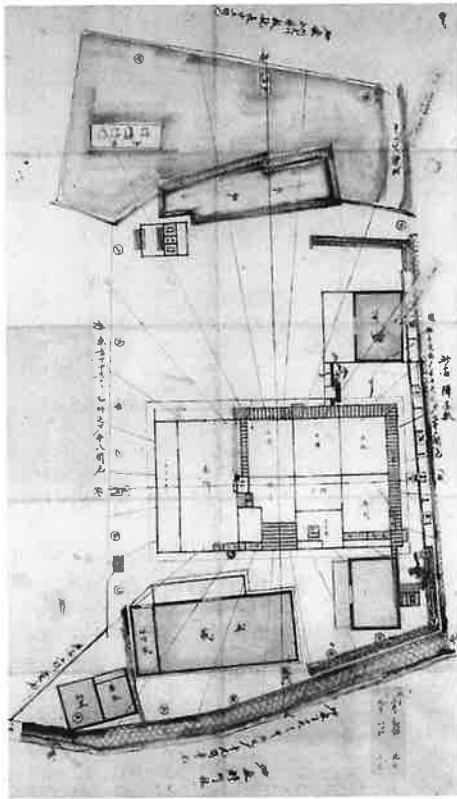
山梨県立尋常中学校(後に甲府中学校)から東京の京北中学校を経て、明治三十八年に早稲田大学英文科に入学した。高田蝶衣らの早稲田吟社に参加し、本格的に俳句を始め、『ホトトギス』へ投句する。このころから同年齢で一学年上だった若山牧水との交流が始まった。そして、蛇笏が下宿していた牛込の

「霞北館」に牧水が身を寄せたのが明治三十九年九月だった。二人の生活はおよそ半年続いた。

蛇笏は牧水らの影響もあり、詩、短編小説に傾倒し、河井醉茗選の『文庫』や、児玉花外選『新聲』の newer 詩欄に作品を発表した。特に俳句は高田蝶衣の後を引き継ぎ早稲田吟社の中心となり、また高浜虚子選の『国民新聞』俳句欄に精力的に出句し、「俳諧散心」に参加した。文学に全身を注いだ時期である。

しかし、虚子が俳壇から身を引いた明治四十二年、蛇笏は「一切の学術を捨て、家郷に帰り、田園生活に入る」と言って早稲田大学を中退し、郷里、山梨に戻った。虚子の俳壇引退と地主の長男として「飯田家」を守らなければならぬ気持ち、加えて俳句は東京にいらなくても創作できる、いや、「わが故郷」の方がより俳句には適していると考えたようだ。この一連の蛇笏の行動に対し、心を痛めたのが牧水である。蛇笏の文学的才能を評価していた牧水は、蛇笏の行動を受け入れることができず、明治四十三年八月、蛇笏に宛てた書簡で、再び上京し文学活動に邁進するよう説得に動いた。

わが敬愛する友よ、君にあて、筆をとることは僕に取つて全く少からぬ喜びであ



飯田家家相図(右中が牧水の滞在した蔵)

る、慰めである、

君の手紙は事実数編の詩、小説を読むに値した、高山国の平原の秋を知らぬ身は

一種の食欲めいた憧憬を感じた、

十日後には山深い蛇笏の家を訪れる。明治四十三年九月三日のことである。蛇笏と牧水は、この時ともに二十五歳。東京から山梨の蛇笏の自宅へは決して楽な道の方ではないが、牧水にとっては親友に逢える喜びの方が大きかったと思われる。そして二人は再会を喜び、終日文学談義を交わした。

蛇笏はまだ独り身だったため、牧水の世話をしたのが蛇笏のすぐの妹志津系であり、その時の様子を語ったのが冒頭の一文である。

蛇笏の家は古くからの地主で、母屋の周囲に蔵が建てられていた。幕末の家相図を見ると母屋を取り囲むように蔵がある。

牧水が訪れた明治四十三年頃、蔵の一つである表の蔵の二階を「俳諧堂」と称し俳句会に使っていた。この蔵の二階に牧水を招いたのである。(その後、自宅を「山廬」と称する)

蛇笏は酒を飲まなかったが、牧水のために十分な酒を用意した。接待役となった志津系は「牧水さんはとても気さくな方で、朝からお酒を召し上がって、明るく接してくれ」と回想している。

二人は大いに議論し、牧水は酒を飲み、時季の葡萄をふんだんに食べては周辺の里山を散策した。

上機嫌の牧水は時には声をはり上げて短歌を朗詠したという。

蛇笏の『牧水追想』(『飯田蛇笏集』第七巻所収)によると、牧水自身の作であるか、誰か別人の作であるかを知らないが、

気に入った作品だったとみえて、

春の雨ふれる宵なりあたたかう君にながるるわが泪かな

の歌を高唱するのが牧水の癖であり、「美声の持主たる牧水の朗詠は山岳に併してひびきわたった」ということである。

こうして日を送るなか、牧水は蛇笏に対し、是非東京へ出て一仕事文学的に活躍をしろ、このまま君が山中で埋もれてしまふのは絶対不可い。俺は君の天分を認めるのだ。是非ともその天分を生かせ。でなければ俺は承知出来ない。

と説得を続けた。蛇笏は、牧水の篤い友情を深く感謝しながらも

この山中に百姓として生涯をおくるに遺憾ない精神で一杯だ

として拒否し続けた。二人の人生観はかなりの隔たりがあり、「時に罵倒しあい、昂奮して沈黙を続けることも屢々あった」というほどの激論であったと回想している。

牧水の滞在は九月三日から十三日までの十一日間にわたったが、上京を促す牧水に対し、最後まで蛇笏は首を縦に振ることはなかった。牧水は蛇笏を説得することを諦め、一人信州へと足を向けた。

実は蛇笏には上京出来ない大きな理由が

あった。祖母から「この家を守ってほしい」と託され、その祖母が危篤に陥り、その中で再び懇願されていた。今や死にかけている祖母の命がけの言葉は、蛇笏の心に深くしみ込んでいた。このような状況の中にあつて、滞在中の牧水に祖母危篤を悟られないよう振舞うものの、蛇笏は、牧水の説得に対し、かなり感情的になり

俺はむしろ君が現在とつている生活態度をとらないのだ。親が泣こうが兄弟が涙をこぼそうが其塵事には無関心だ、自分が好きな道の短歌の道を一と筋に邁進して、自分自身の欲望をさえ満足せしめればそれでいい、そんな利己主義は到底俺はゆるすことが出来ない。

とまで言っている。牧水は蛇笏の祖母が危篤とは知らず、信州に旅立った。祖母はそれから二日後の九月十五日に亡くなった。

牧水の十一日間に及ぶ滞在のなかで、出京を拒み続けたことは、その後の蛇笏に「心の痛み」として残ったようだ。蛇笏が第一句集『山廬集』を出したのは牧水没後の昭和七年である。出版を記念して祝賀会が催された折り、挨拶に立った蛇笏は、句集を出すにあたって、まず

若山牧水の靈に心から頭を下げ深く陳謝

した。これは往年の牧水が抱いていた私に対する篤い友情に対して、今更ら文学の道に入りこむようであつたら何故牧水が出京をうながし激励してくれた当時こそうしなかつたか、ということが深く思われたからであつた。

と語り、「生涯の句道精神をつづけることを牧水の靈に誓う」と結んでいる。

蛇笏は明治四十二年大学を中退し郷里にもどつた後、昭和三十七年十月、七十七歳で死去するまで「山廬」から居を移すことはなかつた。明治四十三年九月十三日に別れた二人はその後会うことはなかつたが、牧水が亡くなる少し前に蛇笏は山梨の新聞社の詩歌の選者を牧水に依頼している。牧水は

めづらしきおたより胸をおどらせました御申越しのこと喜んで承知しました何だつたらずつと引続いてにてもかまひません——中略——そのうち行くか来ていたゞくか御逢ひしたいものです

と蛇笏からの依頼を大変喜んで返信している。

俳人飯田蛇笏と若山牧水は大学で出会い、共に詩歌に情熱を燃やし、同じところに投宿した。そして積極的に作品を発表した。その後の二人の生き方は違つたが、最後まで互い

の「天分」を認め、「篤い友情」で結ばれていた。

昭和三年九月十七日 牧水永眠

この知らせを受けた蛇笏は、すでに編集の終わつていたはずの『雲母』十月号に追悼句一句を黒枠で載せている。

謹んで若山牧水君の英霊を弔ふ

飯田蛇笏

秋の晝一基の墓のかすみたる



『雲母』(昭和3年10月号) 21頁

*本稿執筆に際し、山梨県立文学館にご協力いただいた。

「筆者プロフィール」 いいだ ひでみ

昭和二十七年山梨県東八代郡境川村(現笛吹市境川町)生まれ。



俳人飯田蛇笏の孫。俳人飯田龍太の長男。「山廬」当主。蛇笏・龍太の自宅の維持管理を行なう。



大正時代の千本浜海岸

「濱人」の文化と賑わい 四方一渺

沼津の町の町外れ、片浜村にほど近く桃畑が拡がっている。その中を二間ぐらいの細い道が千本松原につづいている。地元の人たちは「浜道」と呼んでいる。牧水の住まいはこの中ほどにあり、

浜へ出る漁師たちの径に沿うたわたしの庭の垣根は、もと此処が桃畑であつた當時に用ゐられてゐた儘ままのを使つてゐる

と牧水は記している。(「庭さきの森の春」注1)

浜道はこれと並行して何本か住宅地と海岸を結ぶ生活通路がある。現在の沼津西高校が昭和二十三年、校地を千本に移転したが、校地の真ん中を校舎用地と運動場を二分して一本の径が通つている。奇異な感じがするが、漁師と学校との話し合いにより、漁師が漁に出るための生活道路として残された道である。亜熱帯の灌木や野草植物が繁茂する松林の間をくぐり抜けると丸い大きな濱石が一面に敷きつめられた海岸に出る。穏やかな駿河湾の浪の彼方には左に大瀬崎、右に三保の松原がのぞまれ、松林の上には雪を頂いた富士が秀麗な姿をみせるあたりに、漁師たちの網小

屋が点在する。もつとも南にあるのが下河原の漁師の所有する東天王網でその隣に西天王網があり、その北に新網(下網)、さらにその北側に千本浜海岸でもつとも古い小池網がある。小池網から北へ東間門から富士郡小須にかけて、かつて十五、六の網小屋が点在した。網小屋には地元では「濱人」と呼ばれる漁師が十数人詰め、常に回遊してくる魚群の様子や風向き、潮の流れ具合を見張り、魚群が見えれば網仲間を大声で呼び集め、魚の動きを見計らつて船を出し、網を撒き、海岸に引き寄せた。漁がなければ網を干し、網や舟の繕いに余念がなかつた。仕事の合間には網小屋や海岸でも次の漁の予定や計画、あるいはその日の漁のでき具合に花を咲かせた。その生活は牧水にとつても恰好な歌材であつた。

幾人の海人の乗れるや朝闇の浪に漕ぎいだし漕ぎ騒ぎたる

手繰網たぐりあみたぐりて曳きて得し魚は皿ひとさらの美しき雑魚ぞこ

三々五々集まつて来た濱人たちはまだ明けやらぬ朝闇のなか魚の群れに声を弾ませながら舟を漕ぎ出していく。地曳網で獲えた雑魚が皿に盛られ明け方の光に輝くと濱人たちの声は一段とはずむ。手繰網は、メバル・タイ・ハゼ・カレイやイカ・タコ・エビ・ナマコな



千本浜海岸の「濱人」たち

どの魚類と水性動物を対象としている点で、規模は小さいが使いやすい漁具であった。大正十四年十月五日、念願の新居を新築した牧水家の近くに賑わう漁師のかけ声に牧水の心も弾んだ。

浜辺に住みて(注)

珍しくけふ引網のかけ声の背戸なる浜ゆ
聞え来るかも

引網のかけ声きこゆ霜深き今朝を浜より
かけ声聞ゆ

静かなるこの暁を海人がどち声うち合せ
網引く聞ゆ

海に落つる夕日のひかり照りたればこの
長浜の冬の寂びざま

この朝の浪のとどろき高かるよ障子うす
あをく明けむとしつつ

黒々と小舟群れをり冬風のかの沖あひの
ひとつところに

立ち騒ぐ浪の音かも恙つがありていねつつ聞
けば真近き浜に

わが庭に小石おほかり荒浜の浪のとどろ
き響き来る庭

わが庭は芒すすきの原に続きたり芒枯れ伏して
色のさやけさ

手繰網引ける姿のあはれなりけふ冬風の
浜の渚に

椿の葉つやだち光る日和なりくるほしく
起る鴨鳥ひよどりの声

狩野川以西の下河原から原に至る二十キロメートルあまりの駿河湾の曲汀に沿った村々の漁師たちは、網小屋を開き大謀網だいぼうあみをかけ生業としていた。活気のある網小屋の賑わいは村人の生活そのものであったが、ひっそりとした冬の人影のみられない網小屋もまた一抹の情感をにじませるものであった。

『沼津市史 通史別編 漁村』によれば、明治二十年頃の千本地域を含む本町の戸数は二千戸で、そのうち漁家の戸数は九十戸、全

戸数に対する漁家の戸数の比率は四・五パーセント、商業・農業・漁業等従事者に占める漁業の割合は百分の一であった。この地域は遠浅のため船を係留するところもなく、漁業の従事者は、農業の合間に地曳網や小漁船による手繰網や釣漁をおこなっていた。

濱人は、大謀網のほかに、主として片方約四百五十メートル、それを中央の繋ぎ目に付けた長さ七十〜八十メートルの袋状のシラス網に左右両方の網で追い込んだ。これを左右各々の網に付けた二百メートルほどのロープで曳く、地曳網・手繰網さらに小舟を出して行う釣り漁が彼らの主な漁法であった。

松原に沿って長汀ちやうていに展がる千本浜周辺の海域は豊富な魚種にめぐまれている。『静岡県水産誌』によれば、明治十九年〜二十三年にみられる魚種はマグロ・メジカ・カツオ・ウツワ・イワシ・シラス・アジ・サバ・ブリ・イカ・タイ・ヒラメ・ホウボウが挙げられており、多種類の漁獲物は主として農業生産物の補食として生活と健康を保持する栄養源であった。千本松原・千本浜をとりまく多様な生活様式はただに食生活の供給・確保にとどまるものではなく、千本松原・千本浜のもつ生産的・文化的意味と相俟あいまって漁業に付加価値を生み出していった。

問宮喜十郎執筆の『沼津史料』によれば、明治二十年代には桃郷・志下周辺に避暑・避寒に訪れる皇族・華族なども次第に多くなり、同二十一年六月十四日には千本浜海岸に海水浴場が開設された。同二十二年二月一日、東京・静岡間に東海道線が開通され、同月二十一日沼津に停車場が開かれると、

沼津ハ、東駿ノ沼津ニアラズシテ、一躍東海ノ沼津ト化シ、東京横浜ハ、恰モ隣家ノ如ク、静岡名古屋ハ軒先ノ感アリといわれ、沼津の町は転機を迎えた。

さらに同二十六年、桃郷に御用邸が造営されると、皇族・華族・政界の貴顕らの来往は繁くなり、同三十二年三月には静岡馬込の西郷従道邸に滞在していた中山二位局が千本松原を遊覧、同三十九年一月八日には皇后陛下（昭憲皇太后）が初めて千本浜に行啓され、

くれぬまに沼津のさつにつきにけり
しばしみてこむ海のけしきを
と詠まれた。なお、その跡には「昭憲皇太后陛下御座所」の碑が建てられ、今日に至っている。このように、千本浜への行啓など千本浜や千本松原は名実ともに東海の名勝の地として脚光を浴びていった。

狩野川の川口から原につづく二十数キロメートルの海岸線は、富士川から流れ出た土砂



昭憲皇太后陛下御座所の碑と昭憲皇太后の歌碑

が駿河湾のながれによって堆積、形成された砂丘で、富士を仰ぎ白砂青松を背にして豊富な魚種となだらかな恰好な海浜に恵まれている。海岸に沿った海底には岩礁もなく、かねて生計の一助として伝えられてきた網漁、とりわけ地曳網などいわゆる「浜遊び」には最適であり、京浜・中京・関西の貴顕や資本主義経済の中で成長してきた企業家・有産階級

を含めて野趣豊かな遊び・行楽の文化をもたらしこととなった。

問宮はこの「浜遊び」を中心とする游客の行楽の状況をつぎのように生き生きと描写している。（問宮喜十郎『沼津史料』）

游客ノ需メニ応シテ漁スルコトアリ其網ヲ鯛網ト称シ得ルトコロハ多ク、鯛、方頭魚、鯡、鰹等ノ類、乃チ沙上ニ席ヲ設ケ漁夫ヲ走ラシテ酒ヲ求メ砂石ヲ疊ンテ竈ヲ成シテ酒ヲ暖メ、鮮ヲ撃ツテ酒ヲ下、蓋シ本地遊客ノ最大快事ナリ、近時海水浴場大ニ行ハレ都人士ノ来游年々頗ル多ク、常ニ数字ノ茶亭ヲ開キ四五月ヨリ九月次マデハ亭中ニ海水温浴ヲ設ケ以テ婦女子病客ノ便ニ供ス、異日大磯、鎌倉若クハ須磨ニ譲ラザルノ高樓層閣青松白砂ノ間ニ連ナルノ盛況アルベシ

これは問宮の手になる『沼津史料』の記事であることからすれば、明治十年代後半から二十年代にかけての千本浜の情景であろう。ここには千本浜やその網曳きの文化による沼津の将来の発展が予測されている。夏場には海水浴・避暑避寒の客を迎えて、海岸には休憩所・売店・大木を輪切りにした貸浮輪などの店々が開かれ、同三十年代後期には、松林の中に常磐家・植松亭・沼津館などの茶店・

料亭・旅館などが開かれ、濱人の生活に根ざす新しい都会的な賑わいがもたらされていった。同三十三年、城内に千本座が開業し、日露戦争が勝利のうちに終わると、同三十九年には三月の第七師団の馬匹の競売が千本公園で盛況裡に行われた。四月十三日には盛大な花火の打ち上げの下で凱旋軍人の歓迎会が開かれ、十五日には山車や余興も加わり、戦没者の招魂祭と凱旋将兵の慰労会が行われるなど、千本公園は連日町民の戦捷気分であふぎった。

千本浜および千本松原を名勝の地とし、公園とする動きもにわかにより高まり、小出定豊町長みずから先頭に立つて計画の実現に動き出した。宮内省からはほぼ三万坪の地を借り受け、さらに町有の四万坪を加えて、そこに遊覧道を開き、四阿を設け腰掛を置き、運動のための機械も備えるなど人々が集まり逍遙し、鑑賞のための施設も設置され、「沼津公園」が明治四十年十二月一日に開園した。なお、千本浜公園の入り口に当時仙松閣に滞在していた西園寺公望の揮毫による「沼津公園」の碑が建てられている。

明治四十一年三月十三日には、再度皇后陛下の千本浜海岸への行啓があった。再度の行啓は、それまで沼津の町民に意識されてい



西園寺公望の揮毫による「沼津公園」の碑

かつた千本浜や千本松原への関心を高めるとともに、その価値を認識させることとなった。その月の二十日には、李家隆介静岡県知事が東駿地方の視察の折に千本公園を視察している。そして翌四月七日に、千本公園に施設設備のつくられていることが『静岡新報』で報じられ、そして八月二日には千本浜「沼津公園」の開園式が行われた。

千本公園の開園に先立って清遊会が開かれたが、翌年五月二十六日には千本浜で写真大会が開かれるなど、郷林地帯住民の共有意識と慣行の上に、都会の人士や地元漁師との混然とした浜遊びの集いなど千本公園一帯は、町民や沼津来遊者によって都市の文化を共有する活動・生活・行楽・集会の場として、沼津の文化形成の上に大きな役割を担っていくことになった。

このような機運の中で浜遊びの担った意義は大きい。とりわけ若山牧水が創作社の活動を通して沼津の文化の開花に果たした役割は大きかった。

大正九年八月十五日、家族と共に沼津在楊原村上香貫に転居した牧水は、長谷川銀作に委託していた『創作』を大正十一年七月号から沼津で自分の手で発行することとした。そのため家族の住む住宅と自分の読書・執筆のための書齋、それに牧水が永年念願としていた雑誌『創作』の編集・発行を兼ねた創作社の事務所の建築の問題を解決する必要にせまられた。そのさ中、『創作』および牧水自身の健在を歌壇にアピールする思いに駆られた

創作社全国社友大会預告

時日 大正十二年四月一日午前八時開會

場所 静岡縣沼津町西川館

順序 查問歌會及び講演會 夜間懇親會

順上 互選兼題 春季歌詠 一人一首 (出席社友者による)

會費 查問一圓 夜間五圓

備考

左は翌二日まで滞在する人のために第二次會を開く、即ち千本松原歌會、富士朝會、正午前社に於て全會費一圓、即日午後全會費一圓、又は前會は正午前社に於て全會費一圓、即日午後全會費一圓、右、直ちに出席申込者を募り、その氏名を奉覽及び三月號誌上に發表す。

大正十一年一月十日

創 作 社

創作社全国社友大会の予告

ものか、『創作』大正十二年新年号の誌上に、創作社全国社友大会を沼津で行うことを予告した。

それによれば、期日は四月一日午前八時、狩野川べりの臨川館で開会。大会の内容は、昼間は歌会および講演会で、夜は懇親会を計画している。そしてその「備考」欄に、

なほ翌二日まで滞在する人のために第二次会を開く。即ち朝千本松原散歩、富士仰望、正午創作社にて午餐会(会費一円)、同日午後全く閉会す。なほ同会場は旅館なれば宿泊自由(一泊三円)なり。

と、千本松原の散歩、富士山を楽しむなど、沼津の名勝・景観の鑑賞を全国の社友に紹介し、沼津への宿泊を勧めたのである。

幸い一日、二日ともに好天に恵まれたので大会はもとより翌日の余興もつつがなく盛大に行われたが、とりわけ第二日目の千本浜での地曳網は、全国から沼津を訪れた社友たちに論外の「大当り」であった。網は二網曳いたが、第一の網には「第一階級」に属する大きさの興津鯛一尾に、濱人の漁師たちを「この浜にも斯んなのがるのか」と驚かせた大章魚一尾、鯖一束(百尾)と二十、烏賊無数、雑魚は二疋(およそ二斗)の収穫があり、二番網にも鯛三尾、烏賊十数尾、雑魚無数という

大漁であった。早速臨川館と海岸近くの東京亭の料理番や牧水宅出入りの魚屋を呼んで調理させ、前夜の懇親会で飲み残した樽の酒を取り寄せて酒盛りを始めた。料理を待ちかねた者は東京亭から木炭一俵を担ぎ出してきて火をおこし、ピンピン跳ねる大鯖を火にぶち込んで早速浜焼き、野性味タップリに両手に



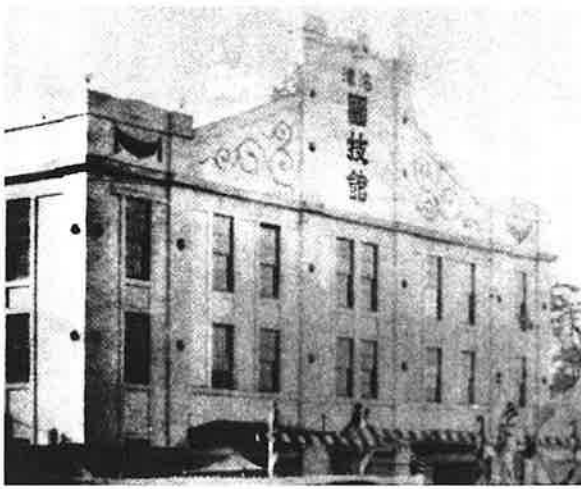
創作社全国社友大会における記念撮影



千本浜で酒盛りをしながらつろぐ社友たち

もって口に頬べるものなど物凄い光景も現れた。福井県から参加したある和尚などは、小さい烏賊の首を抜き捨てて海水で洗ってピチャピチャと喰い、「エライ事をやるなア」とその野性的な仕草を侮蔑の目でみていた一人が、これを真似、「ウン、これアうまい」と飛び上がって喜ぶなど、海浜は次第にドヨメキに包まれていった。

時間は過ぎてても一向にその場を離れようとするものではなく、創作社での昼食として用意



「千本松原伐採反対市民大会」が開催された国技館

してあった「おこわ」の折り詰めを浜に運んでその場で食べるという始末となり、地曳網は牧水が予想した以上の大首尾に終わった。この二年後の大正十四年十月五日には、松原と野草と鳥の囀り、二階部屋からの富士の眺望、そして千本浜に網曳く濱人のかけ声のきこえる千本松原の一隅に、想を凝らした念願の新居が建てられて転居した。その翌年の五月一日、牧水が夢見た長詩・散文詩・短歌・俳句・民謡・童謡の各詩形をとりこんだ総合文芸雑誌『詩歌時代』を創刊するなど、千本松原の住まいを活動の拠点と

して、牧水の文芸活動の高揚期を迎えた。全国的な半切揮毫・講演なども行った。大正十五年、牧水が愛着して措くことのない千本松原の静岡県による伐採計画に対しては、八月十五日付の『沼津日日新聞』、九月十四日から十六日にかけての『時事新報』（東京）に、伐採反対の記事を投稿し、九月十一日の千本浜道の沼津・国技館で開かれた「千本松原伐採反対市民大会」の壇上に立って、沼津の文化の源泉地千本松原伐採反対の熱弁を振るった。

牧水は昭和三年九月十七日、稲玉信吾医師に看取られながら亡くなったが、十八日の通夜に、尾上柴舟夫妻・尾山篤二郎ほか、杜友百人にもおよぶ弔問客が訪れ、十九日に行われた告別式には、改造社・婦人の友社・東京日日新聞社・時事新報社をはじめとする各新聞社・雑誌社が取材に来沼し、個人では、尾上柴舟夫妻・尾山篤二郎・太田水穂・斎藤茂吉・土屋文明・矢代東村・北原白秋など当時の歌壇を代表する歌人たちが参列のため沼津を訪れた。

ところで、毎年四月の「浜の観音さん」祭りには、大曼荼羅を掲げ、見せ物小屋が建てられ、露店が並び、市内はもとより近在

の村々からも芝生に広げられた筵の上で、重箱に詰められた弁当を食べ、家族総出で春の一日を楽しむなど、千本公園は賑わいの場となった。

* 本稿は、『沼津の文化と千本』(未発表)の一部である。

注1 「庭さきの森の春」(増進会出版社刊「若山牧水全集」第十三巻所収)

注2 昭和二年詠。歌集『黒松』所収

注3 明治天皇の生母・中山慶子

注4 牧水の妻喜志子の妹・潮みどりの夫

〔参考文献〕

間官喜十郎著『沼津史料』(沼津市史叢書八)

『沼津市史』通史別編 漁村(沼津市)

大悟法利雄著『若山牧水伝』(短歌新聞社)

若山牧水著『若山牧水全歌集』(短歌新聞社)

山口徹著『沿岸漁業の歴史』(成山堂書店)

平山岩太郎著『沼津之菜』(蘭契社)

『沼津之華』・『静岡新報』・『沼津朝日』

〔筆者プロフィール〕よも かずみ

昭和五年九月、沼津市生れ。早稲田大学大学院文学研究科教育学専修修士課程修了。元国土領大学文学部教授。本会理事。



『静岡県教育史』の編纂に携わるほか、著書に『中学校教則大綱』の基礎的研究『沼津教育史年表』(沼津中高八十年史)ほか多数。

第二十二回

中学生短歌コンクール

ここ数年、市内中学生短歌コンクールの応募が二千首に近くなっており、その成果を喜びたいが、類似素材のマンネリ化した表現を問い直して見たい思いもある。中学生には、まず「もの」を見て驚く力（発見）をつけてほしいし、中学生らしいナイーブな感性を素直に表現してほしいと考える。

今回の応募作品は、十五校から一八七七首で、その作品の中から、特選十首、入選四二首が互選されたが、選歌から洩れた作品にも入選作品と、差の僅少な作も一四〇首ほどあった。

選者互選の特選作品は、次のとおりである。

時を経た祖父の赤紙握りしめどんな思いが
つまっているのか 服部大地（第四中）

放射能気にしながらも黙々と田を作る祖父
頼もしい背中 宮澤 蓮（今沢中）

原爆をなくせと歌う鐘の音心に響く平和の
祈り 加藤雅仁（金岡中）

この三首は中学生として、今の社会の出来事
を見たり、聞いたりして、考えて詠んでいるしつ
かりとした作品である。

何気ない毎日の日々これこそが幸せと知る
あの地震から 浅野愛佳（暁秀中）

消極的な日常詠であるが、東北大震災を教訓

にした素直な自戒の歌であり、このような作品
が今回はもつと歌われてほしかった。

よく来たね微笑むばあちゃん近づくといつ
の間にやら僕より小さい藤原一樹（第二中）

ばあちゃんの小さな畑あざやかにすにと
まがツヤツヤ光る 矢田湖華（第一中）

核家族化してしまった生活を背景にした里帰
りの作品のようだ。へいつの間にやら僕より小
さい（へなすにとまがツヤツヤ光る）田舎の
祖母に会えた風景を上句にして下句に焦点が絞
られて極まった。作者の言葉（詩）が産み出さ
れ初々しい歌になった。

君の目は誰を見てるか分からないアタシの
目には君がいっぱい 杉山 海（第三中）

どうしようもないときだつてあるんだと夏
の夜の風優しい気持ち 高橋玲奈（第三中）

前の一首は相聞歌であり、二首目は相聞歌ら
しい歌であるが、どちらも中学生らしい感性の
生きた上手い作品である。ことに二首目の方は
詠い慣れた技巧が感じられ、短歌に馴染んでい
るふうに見える。

暑かった苦しかったでも勝ったあきらめな
いから奇跡は起きた 西山明星（第四中）

クラブ活動の作品が、応募歌をかなりの数で
しめるが、この作品だけが特選になったのは、
一句、二句、三句、下句の五句が「た」で括る
リズム（調べ）の隠された巧みに仕上げられた
からである。

盆休み茄子馬で帰るご先祖さま今年の道は
混んでるだろな 丸 浩輔（市立中等部）

お盆の迎え火を焚きながらご先祖を想う作者
である。交通渋滞という現実感を取り入れて読
み手をユーモアに誘うのがよい。

短歌は日本語の原点として生まれ、万葉集で
様式の整った日本語の伝統文学になった。しか
し、その歩みは一樣でなく流行と衰退を繰り返
して時代を経て来たのである。表現方法も、言
葉の変化（文語から口語へ）に左右されながら、
現代の短歌なのである。いまの中学生短歌の発
想はほとんど日常の話ことばで詠われ、軽いの
が特徴であり、それで良いのだが、短歌は自分
を表現する詩であることをわきまえて、詠い続
けて欲しいと思う。なお、選に当たったのは、
青木朝子、須永秀生、杉山芳春、星谷亜紀、曾
根耕一の五名である。

（曾根耕一）



第 58 回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式
平成 23 年 10 月 16 日（日）

第十六回若山牧水賞に 大下一真氏の歌集『月食』



(写真提供 宮崎日日新聞社)

第十六回若山牧水賞に大下一真氏の『月食』(砂子屋書房)が選ばれた。選考委員は、佐佐木幸綱・高野公彦・馬場あき子・伊藤一彦の四名。授賞式は、平成二十四年二月六日(月)宮崎観光ホテルで行われた。授賞式の後、馬場あき子氏による「牧水の旅に思う」の記念講演が行なわれ、翌七日、大下一真氏の「若山牧水と窪田空穂」と題した記念講演が、延岡市の「カルチャープラザのべおか」で行われた。

大下一真氏は昭和二十三年静岡県賀茂村字久須(現 西伊豆町)生れ。駒澤大学仏教学部卒。鎌倉瑞泉寺住職。同三十九年「まひる野」入会。現在、編集委員。歌集『足下』で日本歌人クラブ賞、歌集『即今』で寺山修司短歌賞を受賞。その他の歌集に『存在』『掃葉』。評論・エッセイに『山崎方代のうた』『方代さんの歌をたず

ねてー芦川・右左口編』『同一甲州編』『同一放浪編』がある。歌集『月食』は、第五歌集で、平成十七年から二十一年までの五四〇首の短歌と長歌を取めている。

受賞に際し、大下氏は「生れは、牧水がよく訪れた土肥町の隣の村です。伊豆の人間にとつて、牧水は親しみ深い人で、そんな牧水の名を冠した賞をいただくことになり、ほのぼのと、酒気に身を委ねているよううれしさに包まれています」と述べた。

選考理由として、佐佐木氏は「本作は、古い日本の美学を表現した歌集であり、これまでの牧水賞は新しい世界や技術に挑戦した歌集が受賞しているが、自然について歌っているのも印象的」、高野氏は「大自然に囲まれた鎌倉・瑞泉寺の住職であるだけに自然を詠んだ歌が多い。どれもしみじみとしていて、平淡な味わいがある」、馬場氏は「年中変わらない自然を何十年も詠むことは難しい。いくら詠んでも同じ歌になるところを、下の一句に新しい観点をつけ、翻すことで『今』の歌として成立させることができる」、伊藤氏は「受賞者の花や鳥を見る目は、自然の有限の命と自分の命を重ねており、晩年の牧水に通ずるものがある」と評した。

歌集『月食』から自選歌十二首を紹介する。

鴨ひよの声聞かぬと見上ぐる空高しさえぎるもの
なく寒さは降るか

除夜の鐘撞き終え音立て蕎麦すすする僧形この
身も寒さは寒し

天窓に白き光を運ばすはどなたぞ人の世は朝
となる

庭を掃く姿たままたま写されてつまらなそうなる
これがわが貌

たらちねの母の胸処にわが手もて戒脈入れて
納棺申す

新聞はここ二日ほど読まざりき母の通夜終え
月食に遇う

僧なれば幾万の経誦し来たれ今声合わすは母
の葬儀ぞ

つくほうしつくつくほうしつくつくほ 寂し
いぞ母のあらぬというは

梅の花ほほほと開き桃の花ぼぼほと笑い人は
戦う

卒塔婆の百本ばかり書き終えて墨の香まとい
清僧にあり

樹下の闇さくらおんなの舞を見し記憶たしか
に今朝二日酔い

天に登る蔓も梯子も見えざれば地上の日暮れ
酒飲み始む

授賞式には、本会から林茂樹・浅井治・長澤靖夫・三宅芳則・原悦子・大島葉子が出席した。